

2025年7月5日

人権ネットワーク八幡 NEWS

事務局 〒523-0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
電話 【携帯】 080-2525-7114(高坂)
【メール】 Tko.koj1224@yahoo.co.jp

お知らせ

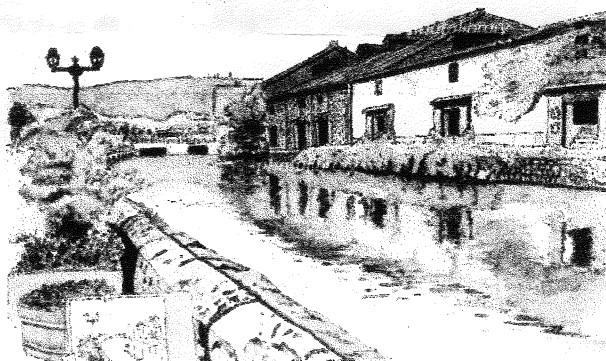
「小樽の人よ」～ イランカラブテー(アイヌ語で こんにちは)～

♪ 「あいたい気持ちがままならぬ～北国のまちは冷たく遠い～」

上の歌は、1970年代に流行った「小樽の人よ」(東京ロマンチカ)である。確か、ボーカルの三条正人は滋賀県出身だったとか。

さて、7月にその遠い小樽から、元小学校教師でアイヌ研究家でもある平山裕人さん(2022年に本紙で「アイヌ民族の差別語の深層」を紹介)が八幡に来られる。今回、教組が招待して、講演される予定である。

残念なことに同時時間帯に集会所でも別の会が開催される。日程調整してほしかった。(TK)



平山裕人さんの講演会

7月12日(土) 15:00～17:00

場所 ホテル・ニューオウミ 主催:滋賀県教組湖東第1・2支部
問い合わせ: Tel077-525-1855 滋賀県教組 清原勝

7月12日(土) 13:30～16:30 「共生・共育」交流学習会(野洲・和田「つむぎの会」から)

場所 旧・八幡教育集会所 主催:共生共育をめざす滋賀連絡会
連絡先 090-3268-4213(代表 江川進市)

読書の草原

「台湾漫遊鉄道のふたり」 楊双子著 三浦裕子訳
中央公論新社刊 2000円+税



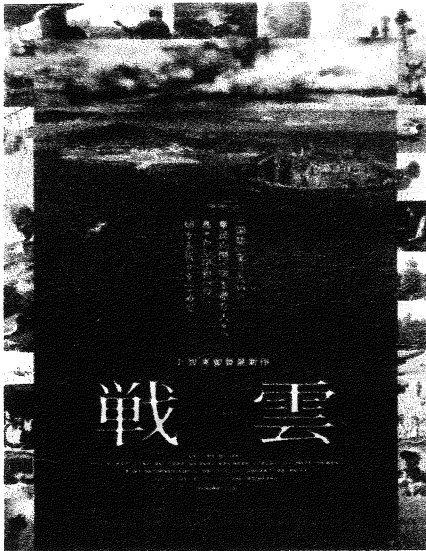
六角精児さんの「呑み鉄本線日本旅」のヒット以来、BS放送を中心に鉄道旅とグルメを重ねた番組が増えています。そんなブームに乗った訳ではないでしょうが、台湾の若手作家楊双子(よう・ふたごと読むそうです)さんの戦前の台湾の鉄道旅とグルメ、更に女性の友情を描いた「台湾漫遊鉄道のふたり」が静かなブームになっています。

日中戦争が激しくなり、南進政策が叫ばれる1938(昭和13)年、日本の若手女流作家、青山千鶴子は刊行した小説とそれを原作にした映画の大ヒットのご褒美に、台湾の日本人社会での講演と台湾紀行文の執筆のため、台湾での長期滞在を許されます。日本の男社会と政府の政策に批判的な彼女は台湾に夢を求めます。その時に通訳として出会ったのが王千鶴。元教師で聡明な彼女の魅力に触れ、友人になりたいと願う千鶴子ですが、二人の間には大きな壁が立ちはだかっていました。支配-被支配の関係の中で、千鶴子は千鶴と壁を越えて友人となれるのか?

全米図書賞の最終選考に残り、日本でも翻訳大賞に輝いたこの作品は私たちの価値観に鋭い疑問を突きつけてきます。「日本の台湾統治は成功だった」「台湾の近代化がうまく行ったのは日本によるインフラ整備のお陰」「だから台湾人には親日家が多い」等と平気でのたまう脳天気な人にこそ読んで欲しい一作です。彼女の作品は台湾で相次いで刊行されていますが、他の作品も読んでみたいですね。

(水来亭平助)

三上智恵監督最新作 「戦雲」 (いくさふむ) を見る



5月18日(日)、大津光荘で沖縄南西諸島で進められている自衛隊増強を扱ったドキュメント映画『戦雲』(いくさふむ)を見た。

「いくさふむ」とは石垣島の抒情詩(とうばらーま)の歌詞に『また戦雲が湧き出してくるよ、恐ろしくて眠れない』からとられている。

与那国・宮古・石垣と続く島々に近年、自衛隊の基地が住民の不安をよそに新增設されている。その現場は、住民が道路に座り込んだり、寝転がって工事搬入車を止めようとするが、警察によってゴボウ抜きにされて、どんどん軍用車や弾薬が入っていくのである。白髪の女性が基地の中で銃を持って警護する若い自衛隊員に向かって「銃を捨てて、迷彩服を脱いで、帰きなさい!!」と呼びかけている姿が印象的であった。

会場に京都精華町の祝園(ほうその)弾薬庫に導入予定の、約8mの実物大ミサイルを描いた横断幕やガゼの写真等が展示されていた。平和は行動することで守れる!

(TK)

海外よもやま話④

コント「混沌」

風の吹くまま気の向くまま、明日の宿は明日決める、海外放浪一人旅。今日は喧噪と混沌の国、インドのお話。

デリー国際空港を出て、市内へ向かうバスを探す。するとバスはこっちだと案内してくれるおっちゃん。ついて行くと、普通の乗用車を指さし「ミニバスだ。乗ってけ。」と言う。「いや、ウソやん。それは無理あるわあ。せめてミニバンにせな。カローラやんか。」とツッコんでバスを探す。バスに乗って目当ての宿がありそうなところで適当に降りる。すると「ホテルを探してるのか?すぐ近くに観光案内所があるから連れて行ってやるよ。」と通りすがりのおっちゃん。ついて行って着いたところは二セの観光案内所。自分と同じようにおっちゃんについて来ただろう韓国人パッカーが何やら揉めているので秒で案内所を出る。道端でリキシャを捕まえて乗る。ほぼ前を見ずに後ろの自分に喋りかけまくってくる運ちゃんのおっちゃん。「インド人はウソつき多いよね。俺はネパール人だから安心しな。」はい、ウソですねと思いながらも適当に会話していると、行きたいと言った駅の逆サイドに着く。「オールドタウン側やって言うたやろ!」と詰める僕。「大丈夫。すぐそこに観光案内所あるから。」と運ちゃんのおっちゃん。「もうええねん!その二セ観光案内所の下りは!さっきやったから!」とツッコみ、無事に目的地まで行かせましたとさ、めでたしめでたし。

白タクの運ちゃん、二セ観光案内所、ネパール人だとウソをつくりキシャのおっちゃん。インドに行ったらこういうことに気をつけようねとガイドブック、地球の歩き方に書いてあったことを入国1時間で3つも体験できて、とても面白かったです。

行き渋り、不登校、ひきこもり、スマホ依存、グレてるヤンキー……。僕がもし総理大臣だったら、そんな日本の中高生にもれなく強制インド旅行を差し上げます。きっと何かが変わるはずですよ笑

「あなたが行く所はどこでも、いつしかあなたの一部となります」
by アニター・デサイ



(K.Kisuke)